

〔日本の陶磁展によせて〕

## やきものと釉薬

日本のやきものをより深く鑑賞、あるいは理解するためには、釉薬の知識が必要です。月刊誌『小原流挿花』通巻217号の〈特集/やきもの〉に、「やきものと釉」という良くまとめられた一章が掲載されていましたので、ご紹介いたします。

釉薬とは陶磁器の素地に水その他の液体を吸収させないという実用的理由、あるいは装飾のためにやきものの表面をおおう薄いガラス質の層のことです。釉薬の発見はやきものの世界を美しく、広いものにしました。

わが国で最初に人為的に釉薬を使ったやきものは奈良三彩あるいは正倉院三彩とよばれる緑と褐色と白の釉薬を使ったやきものといわれています。しかし釉薬そのものの発見は、恐らくもっと早く、それはごく自然な、ある意味では偶発性によって生まれたと考えられています。

まず、初期の穴窯でやく場合、非常に大量の薪を必要としたことです。その際、温度が1200度以上にあがると、窯の中の器物にふりつもった木の灰が自然にとけて、化学的作用をおこし、これがガラス状に品物の表面をおおい、そこで始めて釉が発見されたと考えられます。

すなわち木の灰にふくまれてい

る石灰分（アルカリ）と素地の中にふくまれている珪酸が相互にとけあって、うまい具合に素地をつつみ、吸水性を防いでくれたというわけで、それからは、こうした方法を意識的にもちいて、あらかじめ灰を器物の上にぬったり、あるいは灰と素地の土をまぜあわせたものを器物の上にかけてりして、釉薬の第一歩がふみだされた、というわけです。これが、灰釉、あるいは自然釉と呼ばれる最初の釉薬です。

現在、私たちの目にふれる釉は色や味わいなど実に多種多様にわたっており、その名前や呼称などなかなかおぼえにくいものです。しかし、それを組成の面からみると、一つの基本があって、あとはその組合せの様々な変化が、あの多様性をうみだしているのです。

現在、広く使われている釉薬の最も基本的な形について説明してみましょう。

まず、母体となるのは長石です。長石は融点が1250度位で、これにそれより低い温度でとける石灰分とそれより高い温度でとける珪石を加えて、ドロドロにし、それをやきもののボディにかけます。すなわち、長石と石灰と珪石のこの三つでバランスをとるわけです。1250度位をさかいに、石灰分が多くなれば全体の融点が下がり、珪



灰釉印花文瓶子 瀬戸 鎌倉時代

石が多くなれば逆に上がります。石灰分が多いと石灰釉、長石が多いと長石釉とよんでいます。

長石は、融点をこすとガラス状になり、透明になります。この長石だけで釉薬としたものが、有名な志野です。志野独特の白っぽいあわ立った感じはこの長石釉のおかげです。

ところで、昔は石灰のかわりに木灰、珪石のかわりにワラ灰、モミ灰を使っていました。木灰は、その60%近くが石灰分をふくんでおり、石灰を使うより自然味や味わいの点ですぐれているといわれます。したがって昔の陶工は木灰の選択と製法にとっても苦心したといわれています。この灰ほど微妙で千差万別なものはありません。

木灰の代表的なものが枡灰、栗皮灰（栗のイガの灰）で、鉄分の少ない最上質のものです。外に松の木灰や榎灰があり、これは鉄分の含有が多く、有色を呈します。例えば還元焰でやくと青味を帯びます。その他いろいろな雑木がまじりあった木灰は土灰釉あるいは紺屋灰釉と呼んでいます。これは、昔染物屋がアグ抜きした灰の残りがすを陶工たちがとても珍重したこと由来する名前です。

長石と石灰（木灰）と珪石（珪酸分）・ワラ灰やモミ灰のこの三つの組合せ、バリエーションが色をもたない透明釉の一番の基本です。

次に呈色剤について考えてみましょう。呈色剤として最もポピュラーなものは、鉄・銅・マンガン・コバルト・錫などの酸化金属類です。これらの呈色剤を、先述した三つの基本要素と、いろいろ適当な割合で配合することによって、



志野四方盃 美濃 桃山時代

種々の色が発色されてくるのです。

例えば、透明釉の三つの要素の割合を一定にしておいて、呈色剤の鉄を増減させます。すると、青磁釉（青）からあめ釉（飴色）砂（褐色）・天目釉（黒）といった具合に変化します。あるいは逆に鉄の量を一定にして、三つの要素の配分をかえても色がちがってきます。

さらに、三つの要素と鉄を一定にしておいて、呈色剤としての錫を加えることによっても変化します。錫は鉄を赤い方へもっていく性質があります。このように釉薬の色の変化は実に複雑で、ある意味では無限にあるともいえます。その中で比較的安定したもののみが釉薬として使われているわけです。やきもののさまざまな色あいは、こうした釉薬の性質に加えて、温度や焰の性質が相応じて多様に変化していくわけです。

（吉田宏志）

須恵器円底壺 古墳時代



二彩碗 奈良時代



季刊 美のたより No.98

平成4年2月26日

発行 大和文華館